

猪苗代湖の白鳥

鬼多見 賢

白鳥について

白鳥については、ほぼ全世界で分布する色々な神話がある様である。シーベルトの白鳥の歌、古代ギリシャでは神とされ、その他白鳥の乙女、白鳥処、白鳥の騎士、白鳥座など日本でも古来より霊鳥とみなされてきているようだ。アイヌには白鳥を先祖とする村落が存在して、東北地方にも白鳥を穀霊鳥とする伝説が数多く残っているようだ。

白鳥神社は数多く祭られており、全国では120社以上あり（内九州では13社、県内では6社）初期農耕の世界で、穀霊信仰の発端となる事柄と言えはすべて豊作の恩恵にたいする祈願だろう。すなわち鳥の「ふん」所謂「こやし」の概念だろう。

鳥のふんの肥効成分である、チッソ、カリの2成分は永い冬期間の水流によって容易に流失するので効果は薄い。リン酸分は殆ど全量が土壌に固着されて翌年の播種期にある程度の肥効が期待出来るが、一般に水稻耕作にとってリン酸の施与はあまり効力がないと言われている。ところが注目すべき2つの特例的条件がある。

その1つはリン酸の肥料効果が低温下の稲作に対してだけ非常な威力を発揮すると言う事実がある。

第2の条件としては、年平均気温が著しく低い場合、湿田の様な泥炭またはグライ土壌では、ふんのリン酸分の肥効が有効に発揮できる。

すなわち低温地や湿田の地域では、白鳥があまり来なかったほ場ではさほどの実りも授からなかったと言う事実を繰り返し体験した農民が「白鳥が多く来れば実りが多い」と思いその恩恵の永続を祈って白鳥を神と崇め祭ったのが白鳥信仰の起源と考えられる。

《吾妻鏡》に語られる白鳥八郎の話によれば、〈前九年の役〉で源頼義に抵抗した東北阿部氏の雄、白鳥八郎（阿部宗任〈ムネトウ〉 またはその弟則任〈ノリトウ〉事）とされるが、奮戦むなしく奸計にかかって敗れた。白鳥八郎の残党はその後東北の寒村に隠棲し、崇り神としての白鳥明神を信仰したという。すなわちハクチョウは東北の英雄の生まれ変わりだった様である。

今でも湖面に浮かぶ雄大な姿は神秘的な美しさを持ち本当に神鳥のようである。

まず初めに知っておきたい事は、白鳥を初め渡り鳥は、その餌と適温地を求めて渡り歩く鳥で、白鳥の事を地元の人たちは、寒くなると渡って来て半年も過して行くんだからおかしな鳥だななどと話し、寒い所を求めて歩く渡り鳥と思われがちだが、渡り鳥は生きるために餌を求めて渡り歩くのであって、北の方からやってくるのは、大地が雪に覆われて凍ってしまい、餌がなくなり非常に寒さが厳しく鳥類が生存するのが難しいからだだろう。動かないでいると体が凍りついてしまう。猪苗代湖でも助けた事があるが吹雪の日、いつもの様に浜の中を歩いて餌をやりながら観察をして

いると、氷の上で動けないで、もがいている幼鳥がいたのだ。見ると何と体が接着剤で固められたように腹の羽毛の部分が張り詰めた氷の上で凍りついていたのだ。体を休めている間に凍ってしまっただろう。体温で解けた氷は夜冷えると凍ってしまう。氷の上で休むのは非常に危険だ。成鳥などは長い時間は氷の上では休まない様で、氷の張り詰める所では沖に出るか河川の河口付近でとか、凍らない浅瀬で休んでいるようである。

私 の 家

ここで私の住んでいる所について少し話しておく。私の家は野口英世記念館の近くで国道49号線の南側に位置し集落の中でも湖に1番近くに位置する。湖の中を飛び回っている彼たちは家族の様なもので、毎日の鳴き声で目が覚め、鳴き声で夕日が沈むと言うような毎日で鳴き声もうるさいほど聞こえて来る。冬になると白鳥が飛翔するのは、農家の庭でニワトリを飼っている様なものだろう。白鳥に興味のない人は、何とも感じないだろうが、私はごく自然な毎日の日課の一部の様になっている。

私が物心付いた頃には、白い大きな鳥が時には、湖岸近くまで来ているのが見えた。多くても10数羽ぐらいだったと思える。学校に出る様になり、湖にスキーで遊びに行っているとハンターが来て白鳥や鴨を撃っていたのだ。その時は何とも思えなかったし当時はそれでも良かったのだ。彼たちはいつも沖の方に居てめったに岸には寄っては来なかった様だ。岸の方に寄ってきた時はよくスキーで見に行ったものだ。監視については、父も餌をやり湖に行くが、冬は道が雪でふさがってしまうのでスキーを利用する時もあり、今では父母が夕方の散歩がてら毎日行っている。

渡 来 史

猪苗代湖にはいつ頃から来ていたのか、猪苗代湖の渡来について話しておく。猪苗代湖に白鳥が渡来したのは随分古く、地元の古老に聞いてもはっきりと答えてくれる人がいない。寛文年間(1661~72年、江戸時代4代家綱)時の会津藩主保科正之公が編集させた「会津風土記」によれば「素廻百里許、(エイカイヒヤクリモト、百里ほども廻り回って来る)、鴨・雁・白鳥唼_二 喋千此_一。(ハクチョウココニソウチョウカン、白鳥ここに餌をすすったり話をし、身を休めている。または身を隠している。)環湖数十浦、(カンコスウジュウホ、四方をとり囲む入り江の湖に数十羽の白鳥)浸_二会津・耶麻・安積之三郡_一」と書かれた300年以上前の記録がある。また文化6年(1809)編、「新編会津風土記」によれば「猪苗代の南にあり、周十七里計耶麻、安積、会津三郡を浸す、中略、東北の湖浜は眺望殊に勝れ、安積郡布引山数里の外に綿延し景状極めて秀麗なり。白鳥雁鴨の類来浴す」と記録されているが、しかし実際の渡来は有史以前ではないだろうか。

昭和23年には猪苗代町役場の元助役坂彰氏が関心をもたれ、色々面倒を見てこられて、当時は終戦後日も浅く、米進駐軍の兵隊が車で乗りつけ白鳥を射て獲るのを目撃したがどうする事も出来なかったそうだ。子供たちが寄って来て雪の上に散らばった羽根を拾っていたのが、何とも言われぬ寂しさと、寒々としたしこりが今も頭の中に残っているといっておられる。当時は、常識を越えた事も平気で行われる時代である。猪苗代湖の白鳥も例外ではなかったのである。まだ世界で10,000羽根足らずといわれた時なので大変貴重な鳥であった。

保護の指定(国の重要文化財)

明治25年勅令84号により保護鳥に指定される。大正7年狩猟法改正により一旦狩猟鳥となり、大

正14年国際保護鳥となる。

昭和21年から24年までは、非公式だが、7～9羽と記録されている。その後少しずつふえて35～36年には20羽をこえるようになってきている。38年から40年までは40～80羽、41年からは100羽を越える様になり年を増し毎年増えてきて今では2,000羽を越すようになってきた。昭和41年より急に増えたのは、40年より町保護を始めたからだ。昭和25年磐梯朝日国立公園が指定になり、白鳥を保護しようという話が持ち上がり、昭和40年町の教育委員会を事務局として「猪苗代白鳥を守る会」が設立され、正式に白鳥の保護運動が発足展開されたのだ。昭和45年4月24日、県の天然記念物の指定を受け、昭和47年2月9日、国の天然記念物としての発令を受けたのである。

猪苗代湖北岸一帯に渡来する白鳥はコハクチョウとオオハクチョウの2種類で、殆どがコハクチョウだ。記録によればアメリカコハクチョウも見られた時もあったと言われている。近年では、平成4、5年と毎年1羽づつ見受けられた。

地域の違い

猪苗代湖北岸の様な所の白鳥と砂辺の所の様な地域では、同じ白鳥でも行動が大きく異なってくる。見晴らしの良い所では人慣っつく寄って来るが、アシやヨシなど草が生えているような所では非常に警戒心が強く、慣れるまでは相当の時間と根気が必要である。

その理由は、砂辺の見晴らしの良いところでは、身の危険をすぐ感じ取れるが、アシ、ヨシなど草木が茂って居る所では、いつどこから危険が襲って来るか分からないので、動物的本能とでも言うのだろうか、必要以上に警戒心が強く、現れても一定の距離を保ち遠からず近からずということだ。彼たちが警戒している時は首をいっぱい伸ばしてあたりの様子をうかがうのですぐにわかる。

彼たちの行動範囲は広くその何割かは他の場所へ移動し、行ったり来たりしている。県内はもちろん県外にも行ったり来たりしている様に思われる。又同じコハクチョウでも地域によっては、猪苗代湖に一冬滞在する彼たちと違って体全体が真っ白いものや、頭から胸腹まで茶褐色になった彼たちまで様々である。

猪苗代湖の特徴

猪苗代湖の特徴は、他の渡来地と違って標高が514メートルと高い。また日本内地でも比較的早く10月10日前後に渡来し、翌年の4月中ば（20日前後）までと、遅くまで滞留し、国内では、比較的長い間白鳥を観察出来る唯一の場所だ。白鳥が長く滞在するのは良いのだが、反面寒いと言う事でもあり当地方は稲作地帯なので寒いと言う事は喜ばしい事ではない。しかし海拔516～7mもある所で稲作がここまで発展したのは、猪苗代湖と磐梯山があり猪苗代湖の貯熱効果に依存されるところが大きくそして磐梯山から湧き出る水が田園を潤してくれるためであろう。

猪 苗 代

猪苗代の平均気温は10℃

猪苗代湖は空に浮かぶ湖であって2つの特徴をもっている。

海拔が高い事と面積が大きい事。

海 拔 514m・周囲 49km・深度 94.6m

面 積 103.87km²・容積 5.4km³（日本第5位）

透明度 27.5m（日本第3位）・大きさ 日本第3位

54億 t ・ 毎年10億 t が流入・流出する滞留時間は約 4 ～ 5 年

(十和田湖 海拔400m ・ 諏訪湖 海拔759mでも猪苗代湖の 1 / 7 強である)

利 用

おもに発電と農業灌漑

猪苗代湖が貯熱源

盛夏、湖から風は涼しく、晩秋、湖から風は温和に感じる。

猪苗代湖周辺では比較的高所に位置しているにも関わらず豊かな稲作地帯になっている。これは猪苗代湖の貯熱効果に依存するところが大きい。

逆 転 層

上方位気温が高く地表に近いほど気温が低くなる。水が上から流れて来て猪苗代湖に集まる様に、夜間冷えて密度が大きくなった空気が斜面を下り、谷を下って猪苗代盆地に流れこむ。

猪苗代湖に霧が時々かかるが、冷気湖の湖底に猪苗代湖があり冬でも凍結しない。そのため、冷気湖の底に熱源がある状態になっているものと考えられる。

風が強まると逆転層は破壊される。すると天候も変わって悪くなって来る。

逆転層は低温で重い空気が下方にあるので非常に安定している。

猪苗代湖に渡来する白鳥類

猪苗代湖には3種類の白鳥が渡って来ている事が今のところでは確認されている。近年では猪苗代湖の白鳥は、コハクチョウが殆どで、オオハクチョウは渡りの途中に立ち寄る時に見られるくらいだろう。

オオハクチョウは、渡りの途中で羽を休めに来るので、ほとんど毎年立ち寄る様だ。その年により滞在日数もまちまちで長い時期滞在する事もあるし、3月の末に見えた時などは短い日数である様だ。

平成4年1月現在、三城潟と長浜で13羽内幼鳥4羽確認出来た。(13羽のオオハクチョウは三城潟と長浜行ったり来たりしている合計の数である。)平成5年1月には12羽確認しており、又平成6年には白鳥浜にて確認、三城潟では、平成6年3月26日、色の違った白鳥が成鳥6羽幼鳥1羽見受けられ2～3日で渡りがあった。頭から胸にかけて茶褐色になっていて少し離れて行動していた様である。茶褐色になった原因は猪苗代湖とは土質の違う所で餌を食べるので頭から胸にかけて茶褐色になったのであろう。(赤土の粘土状地域あたりではないだろうか)

アメリカコハクチョウは、平成4年1月23日家の前でアメリカコハクチョウが1羽彼たちとは少し離れて寄って来た。平成5年1月19日に又渡来があり今年是一緒に行動している様だ。

近年渡り鳥で見られる鳥では、サギ科でシラサギ、アオサギ、アマサギ、カモメ科ではユリカモメ。

ガン科ではマガンが4年3月に1羽、4羽と短期間だったが羽を休めていた。5年11月20日にも18羽確認している。

夏季には、バンも見られる。又鴨も多く渡って来る。

平成6年にはカワウの群れが確認出来た。近年になつての渡りはなく、初めてだと思う。(約100羽)

鴨 類

白鳥の保護が過保護になると鴨が集まる。

ここで鴨についても少し話しておく。冬場所によっては、白鳥よりも鴨の方が多いように見受けられる所が多くなりましたがこれは餌付けのためであろう。一生懸命お世話しておられる方にさしつかえがあるので、餌付けの保護についてはひかえさせて頂く。

夏猪苗代湖に群生している鴨は、カルガモが大多数で、マガモも見受けられる時もある程度だ。昼間は主として、湖上で生活し、夜間飛翔するものが多く、夏群生して居る鴨と冬渡って来る鴨は、鴨でも全然種類の違う一回り小さな別の鴨なのに、秋の収穫が終わった後白鳥がほ場に舞い降り、落ち穂を食べながらふんをすれば土壤改良に協力しているのに、おまえが白鳥に餌をやるから白鳥や鴨が秋方になると収穫前のは場に寄って来て稲を食べてしまうから困ると良く言われ頭を痛くしている。

冬になると渡り鴨が数多く群生する。その種類は多く、オナガガモ・スズガモ・キンクロハジロ・ホシハジロなどが多く、殆どがオナガガモだ。各地で餌付けをしている所に群生し白鳥より数も多く餌も白鳥に負けないで小気味よく動き回りながら餌付けをした餌を食べている。鴨は餌を食べてしまっても離れ様としないどころかずうずうしく陸の上まで寄って来るし、しまいには店や観光客に餌をねだったりしている始末、これではどちらに餌をやっているのか分からないほどだ。

今湖には1羽のアヒルが野性化して何年も過ごしている。彼たちと一緒に餌を食べに来るが、白鳥とは別行動で気が強く餌の時だけは1番早く食べに来る。(アヒルは古い時代中国やエジプトで本種を原種として作り出されたものである。)

白鳥と鴨が一帯に群生しているのがおかしいのだが、餌付けを行っている地域には一緒になっているのが多く見受けられる。

餌付けを行った時、白鳥と鴨が一緒になって餌を食べるのは、白鳥が食べる分だけしかやらなければ、白鳥の方が鴨より強いので鴨は近寄って来ない。今ではどこでもかなりの量を与えている様なので白鳥も食べるには充分なため鴨が寄って来ても一緒になって食べて追い払おうともしないようだ。これではいくら餌があっても間に合わない訳です。所によっては白鳥より鴨の方が数倍以上も多く、鴨に白鳥が困まれて動けず白鳥が年々少なくなって来ている所も見受けられる。ましてや餌を売っている所もある様でもう営業化して白鳥を商売道具にしているようにも見受けられる。

餌の配布や提供についても考えるべきかと思える。金額は別として配布された物とは別な物を売っているのかも知れないが、売るほどあるのなら配布したり提供する必要はないのではないだろうか。こんな事を書けば一生懸命世話をしているのにお叱りを受けるかも知れないが本当の保護を考えるのであればもっと自然に帰してやるのが本当の保護ではないだろうか。人間が自然の中で生きて来たのでは無く自然に生かされて来たように、彼たちも自然に生かしてやりたいと思う。

当猪苗代町でも餌を買ってまで与えているし、もう少しあげる量のバランスを考えてはどうかと思う。

飼 育 鳥

過保護過ぎて飼育鳥になりつつある。

現在は、自然という事からかけ離れてしまい、データを取るのが難しくなって来た。それは、餌

付けにより自然からかけ離れつつある事で、もうニワトリのように飼育鳥に近くなってしまった事だ。自然の厳しい中から餌を探すよりもおいしい物をどんどん目の前でいただけるんだからこんな良い事はない。

人間の食生活が変わって来たのと同じ様に彼たちも今ではぜいたくになってしまい、自分で餌を探す能力も低下し、うまい物しか食べなくなりつつあるのが現状である。従来のように自然に生えた草の根（前に述べた水草）などはもう食べなくなってしまうんじゃないかと心配している。日本から離れた時、裸で大自然に放り出された様になってしまうんじゃないだろうか。自然の条件よりも餌のもらえるのが第一条件になってしまい従来場所は寝蔵になり、朝餌のもらえる所に飛翔し、また夜帰って来る。だから彼たちの動きも動物本来の動きから少しずつつけて離れて来ているのが現状である。心配されるのは、今後何百年先か何千年先かわからないが、ニワトリのように自分で孵化する能力が低下する事も心配されるし、日本から離れて北の地方に帰った時広大な自然の中で生育出来るかという事だ。大自然の中で襲われる心配も大きく今まで昭和48年から毎日日記を付けていたが、60年でやめて61年からは、別な角度から観察している。

テレビや新聞などで報道されると、珍しくもないのだろうが、湖に人が行く様になり、眺めて来る様だ。中には、犬を連れて散歩がてら遊んで来る人もいて、犬が騒げば彼たちも驚き飛翔してしまうし、なかなか前の様なデータは難しいのが現状だ。

保 護

現在本当の自然環境の意味を持つ保護がなされている地域は数少なくなって来ている。今や保護ではなく自らの営業的観念願望が強く商売的存在となっているのが現状でその数も年々増して来ているのに比例して鴨類が驚くほどの勢いで増えてきている。一番の原因は餌を売る事である。

湖に行くと見ると、昨日まで寄って来ていたのに今日は寄ってこないからおかしいと思う事がある。それは土地の人が散歩に犬を連れて行って吠え立てたり騒いだりして来た後であったり、又ひどい人になるとわざと彼たちを犬で追いかけ回し私にわざわざ面白かったと報告する人もいる。羽が無残にもいっぱい散らばっているのを見ると何とも言えない悲しみと悔しさが込み上げて来る。しかし今のところどうしようもないので、初めからやり直して毎日通い、寄って来るのを根気よく待つしかない。もし見かけたら注意して欲しいと思う。何とか良い方法はないものだろうか。犬を連れて行かないでくれと言って、分かってくれた人もいた。この件については、白鳥の観光地として指定を受け、餌付けをしている場所ならば問題にでもなるだろうが、誰も関心を持たない自然の保護地域では仕方がない。

本当の彼たちを自然に保護するためにも、私が頑張るしかないと思っている。でもこういう心ない人がいなくなる事を心から期待している。

猪苗代湖北岸一帯は（一部を除いて）現在白鳥の餌付けの場所としては指定されていない。その理由は国道から離れていて、冬は道がふさがってしまい誰も見に行かないし餌付けも大変だという事である。言い換えれば自然に保護をするのには、最適な地域なのだ。

古くは、古川美忠雄さん、白鳥叔父さんの大森先生、白鳥の先生として有名なお2人が三城潟浜に餌付けをしているのを見ていた。その頃までは、ここにしか集まらなかったからであろう。その後大変だという事で餌付けの場所を入江浜（通称白鳥浜）に変更し、その後色々な経過があり長浜

でも餌付けをする事にし白鳥浜は一時やめた経過があり又再開する様になったのだ…。現在では志田浜にもかなりの数の白鳥が集まるようになった。

当時お2人は、毎日毎日、朝晩と1日2回も雪の中を1歩2歩と歩いて餌を運び、時には湖の中まで入り氷を割って餌をやっているのを見て大変な苦勞だと思っていた。その後古川さんが餌付けをやめられてから大森先生は白鳥浜に場所を変えられました。やはり人目の多い観光地に足が向いてしまったのであろう。本来なら自然の中の保護の方が大事なのに猪苗代町も観光の道具にされたのかも知れない。残念である。

白鳥の羽は茶道（茶の湯）にも使われている。茶室を清めるために、畳の上を白鳥の羽（翼長）を使って音を立てて清める。亭主が隣室で待客に今何を行っているのかを知らせる必要があるの、それには白鳥の羽がほどよい音色で茶室に響き伝わるのだ。千利休は何でも自作であり、また身近な物を茶の湯に取り入れている。

餌とふん

彼たちの餌は淡水産の植物で、鳥類図鑑などから挙げてみると、「ガマ、アシ、オモダカ、ヒシ、ヒツジグサ、スギナモ、ミズスギゴケ」などであるが猪苗代湖の北岸では、ミズスギゴケ、フサモ、ヒシ、コウホウネ、トチカガミ科のトチカガミ、セキシヨウモ、クロモ、ウキグサ、そしてガマ科のガマ、ヒルムシロ、アシの根、カヤツリグサ科でフトイ、サンカクイ、ホタルイ類などと食べている種類の数もかなりの範囲だ。近年保護のための好意により猪苗代はもとより県内外から集められた、穀物、パンなどのおかげで年々数も増えて猪苗代湖北岸の白鳥も2,000羽を越えるほどになり至る所の浜辺や水辺で見られる様になっている。

白鳥の餌とふんについてももう少し観察して見た。自然の餌を食べている時は、青黒く硬い丁度大きさも形もニワトリよりも大きく、犬のふんに良く似ている。集中的に毎日パンを与えて見たら柔らかく、こぬかと水を混ぜ合わせたような物だった。これから見ても自然の中での主食は水辺に生殖する比較的柔らかい前に延べた様な草や根、芽などを主として食べていると思われ、又上記の植物を食べた後や食べている所を確認している。

夏（居残り）の彼たちはかなりのミズスギゴケを食べている事がはっきり分かる。消化されない“ふん”のなかにミズスギゴケとその芯がそのまま残っている。（冬場のふんは、きれいな緑色～黒緑からこぬかを固めた様な物まで色々な物が多く餌付けによる物、自然な餌と多種多様に思われる。）

地域によっては餌付けの餌によって異なり又自然の物を食べている地域では何種類ものふんが見られる様だ。

餌の食べ方について一例上げて見ると、カヤツリグサ科、ガマ科は根などを食べている様でミズスギゴケは良く食べた後があり、ミズスギゴケ、カヤツリグサ科類のフトイなどは丁度馬や牛が食べたような後に良く似ていたが近年根こそぎ食べているのが見受けられる様になった。ガマや草の根はきれいに掘り起こされ湖にガマと草の茎だけがぽっかり浮いている所が多く見られ、トチカガミ類はクキや根を残してきれいに食べられている。時々ヒシの実を食べて死んでいるのが烏帽子浜の前あたりで見受けられましたが、ヒシも以前よりかなり少なくなって来たので安心しているが、ミズスギゴケについては、頭を痛めている。今までは被害らしい被害は無かったのだが、近年彼た

ちが年を越す様になってから春から夏場に新芽が緑色にふさふさ生えると根ごと掘り起こし食べてしまう。ミズスギゴケが食べられてしまえば、マリゴケも出来なくなってしまいます。

猪苗代湖のミズスギゴケは国の天然記念物に指定されており白鳥よりも37年も前に昭和10年12月24日に指定されているし、私もミズスギゴケ、マリゴケについては感心をもって観察を続けている一人として頭の痛い種だ。

渡り

渡来についてはわからない事ばかりだか比較的天気の良い朝霧のかかっている様な日が多い様に思われる。

(この気候については、天気と行動についてを参照)

彼たちの渡りについて故大森先生はシベリアから一気に北(シベリア)から猪苗代湖まで飛翔して来ると言われておりましたが、私は以前から疑問に思っていた。

白鳥の体で気流に乗って一気に飛翔出来るだろうか、気流に乗るだけの高さに耐えられるか、また秋にシベリアから日本に向かって気流が吹いて来るだろうか、それを考えると私の意見だが、途中の水辺や沼、湖などで休みながら南下し目的地に渡来するのではないかと思われる。

渡来して来た彼たちの中には、幼鳥がかなりの数である事と又その中でもまだ嘴が黄色く嘴峰は薄赤くうぶ毛の抜けきらない弱々しそうな彼たちが何千kmも一気に飛べる飛翔力があるだろうか。彼らが一気に飛翔出来る距離と言うか、一日飛翔出来る距離と言うか、ある程度限度があるのではないかと思われる。だから早いものは朝方から渡りが始まり夕方には中継点と思われる所で、羽を休め夜明けと共に再び飛翔し目的地に渡来するグループや何日か羽を休めて再び渡りに入るグループであって日に日にその数が増えたり減ったりして来ているものと思われる。猪苗代湖も途中の中継点となっている様で数が増えたり減ったり、変わった白鳥も時々見受けられます。

彼たちの飛翔は、神秘的でかつ歴史的な過程で形成され複雑な本能の主で又条件反射と地磁気を持ち気象状態を予知、察知し得る能力を持っているのではないだろうか。

彼たちの渡来は、猪苗代湖では、10月に第一陣がやって来て雪の降り積もる12月頃までにはかなりの数が渡来して、ようやく落ち着き何とか慣れて来る。初めは、泳いで寄って来る数も少ないが、日を増すごとに寄って来る彼たちの数も多くなり、しまいには遠くにいる彼たちも群れをなして飛翔して来るようになる。これは映画のシーンで見られる戦闘機部隊がバタバタと音を立てて押し寄せて来るような勇ましいものである。慣れている彼たちは私が口笛で呼びますと近寄って来て餌を食べるが、私がさらに近寄ろうとすると丁度猫や犬が背を丸めてうなるようなしぐさで頭をより高く口は少し開きつばを飛ばすように嘴あたりにあわの様なものを含んでブーブーという様な低い声を出して私と睨めっこ、可愛いものである。ニワトリなどは首をひっこめ体を硬直状態にして動かなくなってしまうが彼たちの方が野生で育っているので強いのであろう。こんなあんなで彼たちも落ち着き私も一安心と言う所で、まるで自分の家の一員と言った様なものだ。

彼たちの渡来する場所は、毎年同じ様な所に渡来するので、その時期になると毎日双眼鏡を肩に高い所に登ったり浜の中を歩いたり毎日朝晩と今か今かと観察している。朝行つて見ると、遠く沖の方に渡来しているので見つけるのが大変で見過ぎないように注意しているが、霧のかかっている様な日には何回も行ってみるしかない。

以前には朝ばかり気にしていたが、夕方から夜にかけて騒ぎがあるので、朝夕と監視を続けて見たら、夕方に渡来して来たのを何回か確認出来た。いつも朝早く行って見ると沖の方に羽を休めていたのは夕方渡来して、岸で休み朝方沖に行くものと思われる。

夕方渡来した彼たちは岸辺まで来ているので、暗かったり、ヨシやガバなどの陰になっていて何羽が渡来したのか確認出来ないので朝数えている。

まず第1陣が3～5羽ぐらい、時には10羽以上で渡来し、朝方沖の方で羽を休めている。第2陣3陣となると回数を増す事に彼たちも10羽、20羽と数を増して渡来し、この辺から合流してだんだんと岸の方に寄って来る。夕方と日中飛翔して来る様で朝早く行かないと日中には移動するので見失ってしまうから大変で、寒い日などは朝起きるのがつらく大変だ。

(日中飛翔して来る彼たちは、途中で羽を休めていたものと思われる。)

コハクチョウの集団越冬地の南限地は、鳥取県米子市の中海である。

渡来と飛来の違い

彼たちの渡りについては、餌付で白鳥が集まって来た飛来地と以前から自然と渡来してくる所の大きな違いがある。それは、元来白鳥の渡来地であって自然に近い保護をしていれば白鳥だけで、他の鳥は殆ど別な所(少し離れた所)で群生している。今では白鳥の渡来地でない所でも餌付けによって白鳥と鴨が群生している所が多い様で、新聞やパンフレットなどにも渡来地でない所に白鳥がいるとすぐ渡来地などと書いてあるのが目に付くが渡来地と飛来して来る所は別で、白鳥が来るから渡来地ではないのである。何百年か以前より毎年同じ所に飛翔して来る所が渡来地であって、そこから餌のもらえる所に飛翔して行きます。早い時は、その日のうちか次ぎの日から飛翔し始め各地に飛来して行く。観光地などでは、観光シーズン(観光船やモーターボートが動かなくなつてからか終わってから飛翔して来ているのが普通である。)

私も餌付けはしているが、雪でおおわれてしまい餌が不足する分だけ補なっている。

私のところは三城潟浜一帯を中心として東西と範囲は広いのでかなりの渡り鴨が、石を並べたようにいるが、彼たちと鴨は別行動を取っており彼たちと鴨は一緒にはいない。私が行くと彼たちは寄って来るが、鴨は飛び去ってしまう。前にも申した様に元来からの渡来地で、その第1条件としての餌がある事、お家があり身を隠したり羽を休めたり出来てしかも遠浅で、餌になる水草類が生育し砂浜もあり鳥類にもっとも大事な砂も十分ありますし自然条件に恵まれている。100羽いたらその何割かは自分で餌を取らせて出来るだけ自然な餌を取らせる。前にものべた様に人間が自然に生きて来たのではなく、自然に生かされて来たように、彼たちも自然の中に生かしてやりたい又は返してやりたいと思う。

渡 去

故大森氏によると、渡去して行く時は夕方飛翔して行くと言われているが、私が見ていた所では、渡去して行く時は、渡去前に動きがあり北に向かって朝方早くから7時頃までハ形編隊で飛行し、ホーホーと少し鳴き、声事態がかすれて聞こえなくなってしまう様に思われる。そして猪苗代湖で見えなくなつてから檜原湖や秋元湖などで羽を休めているのも見受けられますし、又オオハクチョウや色の変つたコハクチョウも、3月の末になると渡りの中継点として羽を休めているのであろう。時々見受けられる。そう長くは滞在しないのが普通である。

平成6年4月21日、(晴・風なし)午前4時45分野口記念館前の浜で動きがあり、丁度5時その場所から10羽磐梯山に向かって今シーズン最後の渡りがあった。(午前4時45分はまだ薄暗かった。5時ようやく光りが射し始まり明るくなりつつあった)風もおだやかで天気も良く渡りには最高の条件であった。その後夜明けとなり太陽が登り始めた。

平成4年猪苗代湖北岸に渡来していたオオハクチョウ(首にブラッシュクが付いていた幼鳥)が後日北上川で確認されている。(谷口明郎氏報告により)湖や沼あたりの所々で休みながら渡来する時と同じ様に渡去して行くのではないかと思われる。

ホーホーと鳴きながら、多くは磐梯山の方向に向かって、晴れている日に多く渡去して行く。

渡去する2~3日前にホーホーと鳴き、鳴き声も一段と大きく鳴きながら時には空一面が真っ白になるほど大きく飛翔し、磐梯山一帯を旋回しながら猪苗代地区全体を回り餌をくれた皆さんに挨拶でもしている様に飛翔するのが毎日続く。この様な時にはフライトデモンストレーションとでも言うのだろうか。渡去の前振れで私たちは、彼たちが帰るからお世話になった人たちに挨拶回りをしているのだらうなどと冗談を言っている。彼たちが北に帰るのに準備運動をし、羽を慣らすのでだんだん帰るのだなあと思える。

鳥取県米子市から94年3月11日に発信機を付けて放されたコハクチョウ4羽のうち1羽が日本海を横断、約900km離れたロシア・ウラジオストックへ到着した事が山階鳥類研究所の調査で分かった。

飛行速度は、時速70kmと推定された。又3年前には、北海道・サハリン経由が確認されている。(以上白鳥ニュース)

顔(嘴峰)

彼たちの顔のかたちも大きさも人間と同じように1羽1羽違う。頭の大きさ、首の太さそして彼たちの顔の一端でもある嘴峰の違いは色々で1羽1羽皆違い、大きく5種に分けて見た。感心をもって見るとおもしろいものである。

嘴峰の違い(色々な顔について)

1. 頭から嘴まで黒く鼻筋の通って両脇が真黄色くおしゃれな男前の彼
2. 嘴だけが黒くてあとはオレンジ色に頬をお化粧したような彼女
3. 頭から嘴の間にダイヤのマークを入れたおしゃれ彼女
4. 嘴に月形半平太のまねをしたような役者な彼
5. 嘴がアメリカコハクチョウとコハクチョウのハーフのように粹な彼

鳥目

鳥は鳥目と言って夜はだめだと聞いていたが明るい夜には、かなりの数が飛翔したり騒いでうるさくて眠れない夜もある。真夜中は以外と静かになり又朝方鳴きながら飛翔している。丁度自衛隊機が飛行体制を組んで飛行している様なさまで、朝日や夕日に写し出された美しさは格別なものでより神秘的な美しさがある。

天気と行動

彼たちの鳴き声や動きに興味を持った私は、毎年1年間の半分も彼たちと接している訳だから、動きや鳴き声で何か分かる事はないかと関心をもち始めた。彼たちの鳴き声や行動で天気の変わる

事が多く、これは何か関係があるのではないかと思い観察して見る事にした。鳴き声のうるさい時は天気が良かったし、静かな時は天気の悪いのに興味を持った私は、色々観察しているうちに、今では日記もノート3冊以上にもなった。

ご存知の様に猪苗代湖は空に浮かぶ湖としても有名な様に海拔514mと驚くべき高さにある。まず2つの要素を持っている事、湖面の海拔が大で、しかも湖面の面積が広い事である。晴天で静かな時、猪苗代湖には湖岸風が発達し日中は湖上から陸地に向かう風が吹き、夜は風向きが逆になる。しかし冬になり雪が積もるとこの風の交換は起こらないし、仮に起こったとしても吹きすさんでいる季節風によってひとたまりもなくかき消されてしまうのであろう。特に猪苗代湖では湖盆地形をしていて、いわゆる盆地の底部が熱容量の大きい湖になっている。良く晴れた夜や、高緯度地方の冬は、地表は放射冷却によって低温になり空気は熱を奪われ地表に近い程気温が低くなる。このような上方程気温が高い気温分布をした気層を逆転層と言うそうだが、逆転層は良く晴れた夜間ばかりでなく、良く晴れた日には、海陸風、湖陸風、山谷風、などの局地的な日変化をする循環が発達する。このような日には、地表が昼間は暖められ、夜は良く冷やされ、地表が水面で有るか陸で有るかで気温の変化の差が大きく変わるが、逆転層は低温で重い空気が下方にあるので非常に安定している。このような日には地表が昼間は暖められ夜間は良く冷やされる。「野口英世記念館発行学報より」そんな月明かりの夜と次ぎの日早朝から彼たちも騒ぎ飛翔する。その日から快晴の日が続く。

そんな盆地の中で生まれ育った私は、40年以上も彼たちと携わってきた訳だから、彼たちの行動で『鳴き方騒ぎ方で』何れかの変化や動きで天候の変化があり、体で感じて来るようになった。

よく汽車の汽笛が近く聞こえる様な時には明日は、天気が良いと言われていた様に、彼たちの鳴き声も近くに聞こえたり遠くに聞こえたりする。夜中から朝方にかけて彼たちの鳴き声で目が覚める時には、快晴の日が続く。夕方から夜遅くまで、そして朝早くから、いくつかのグループになって屋根の上を、今日は天気が良いから早く起きろと言わんばかりに大きな声を出して飛翔する。そのような朝には、太陽が雪の結晶を、まばゆいほどに美しく輝かせ空高く飛翔する彼たちの羽は天高く舞い上がる羽衣の様に見え、神秘的な輝きの中に雄大さがある。そんな事や鳴き声の聞こえ方が、近かったり、遠かったり、高かったり、ぼそぼそと低く聞こえたり、毎日違った鳴き声と響き方がありまして、だんだんと天気の良い悪いも自然と体で感じる様になった。

前にも述べた様に色々な条件が重なり、猪苗代湖特有の盆地形だから天気の良い日には一段と鳴き声が響き山びこのように跳ね返って来る。悪い日にはあまり鳴かないし張りもなく響かない。人間でも天気の良い日は声の張りが違うと思われる。鳴き声もカン高く聞こえたり、低くぼそぼそと聞こえたり、高ければ高いほど、鳴く数が多ければ多いほど天候は今まで良かった様だし、天気の悪い日は低く弱い、雪が降りそうな夜は1声2声で終わる。ヨシの中に身を寄せ、頭を羽の中に入れて丸くなって動かない時は、吹雪きの日が多かった様だ。又雪が降る時には前触がある。

彼たちの行動は自然そのもので、気圧の変化によって、逆転層がくずれる事によって天気も変わり、彼たち自体行動も変わるし鳴き方もまた聞こえて来る声も変わるのではないだろうか。

鳴き方の一例を上げてみると飛翔している時はホオーホオー、喜んだり嬉しい時は首を上下に振って羽をバタバタさせてウエーウエーと騒ぎ天気の悪い時にはグワーグワーと聞こえてきます。これを何とか、その地方の昔の人が口から口へ言い伝えられて来た、諺がある様に1つ加えられ、白鳥

が騒げば明日は天気が良いし白鳥が騒がない日は天気が悪いと当地方の諺として私が亡くなった後にでもいい伝えられれば幸いではないかと思っている。

帰れない彼たち

白鳥は、野生の渡り鳥がゆえに警戒心も強く群生をなしているのが普通だ。犬や高圧線又は人害、ヒシの実、その他の事故もあって、時々死骸も見受けられる。これらの事で自然死以外に見受けられるのは非常に残念な事だ。また毎年何羽かの白鳥がそのまま年間を通して残る様にもなった。この傾向は近年益々強くなってきている。殆ど今までは1羽だけがなんらかの状態では飛翔出来なくなって残り、又はその付き添いで残る様な事もあった。飛翔出来ない理由としては、犬、いたち、その他による被害だと思われるが、片方の羽根が怪我をしているか又は短くちぎりに取られているのが普通だ。ひどいものは肩羽の所より折れていて痛々しいほどにぶらさがっていて歩行にも困難な様子だ。それを手当てをしてやりたいのだが、一度危険な目にあった彼たちは、警戒心が強くて捕まえるのは、大変な事である。

以前には、飛翔出来なくなった1羽だけが寂しく残っていたためなかなか人の前には出てこなかったのに、今では日本の医療機関も看護体制も良くなったのに比例して、彼たちの付き添いも残るようになり今では、人間と同じように付き添いもいたのだが、帰れない彼たちが多くなると残される者同志がいくつかのグループになって又仲間の来るのを待っている様である。

昭和63年までは1羽だけ残っていたが、平成になると、元年～2年に5羽、2年～3年には7羽とだんだん増えて来た。彼たちの7羽の内2羽は羽根が完全に肩羽の所から折れて怪我しており1羽は片方の羽が短くちぎれていて、後の4羽の内殆ど飛翔出来た様だ。又4年には、12羽居残り12羽全て飛翔出来ず、いずれも羽根に異常が見受けられた。此の辺から付き添いも見られなくなってきた様です。飛び立っても水面から飛び上がるのがやつの様子ですぐ落ちてしまう様である。

以前は彼たちも1羽が飛翔出来ないでいると危険が迫っても他の鳥も親鳥が雛鳥をかばう様に余り離れない様子を見守っていて、これが1家族であって、一番大きいのがおとうさんと、2番目がお母さん鳥そしてまだ少し灰色っぽいのが子供たちかなあなどと想像すると何とも胸の奥が締めつけられるような気持ちで涙が自然と込み上げて来る。これは実際に携わった人でないとわからないと思う。ただただ感服する次第である。

仲間が遠い北国に帰ってしまった後、1羽だけ残された姿はみじめなもので、病院で良く見られる光景の中に、老人がベットの上でじっと天井を見つめている光景と同じ様なものではないだろうか、哀れなものである。人間社会でも早く彼たちの様に付き添って欲しいと願っている。私たち人間も見習うところがあつぱいあるのではないだろうか。又その白鳥を見ておもしろ半分では追いかける人も追いかける人だとあきれかえっている。とかく今の世にありがちな弱い者が苛められても知らんふりしているのが現状で、まだ動物の方がほめられたものだ。

平成5年度には、12羽残り夏場に1羽亡くなって、平成6年度には、17羽も残り、6羽加わった事になる。少しは飛べるものもいて、低空で200～300m程の飛行能力しか無く遠い北国まではとても行けそうにもないので残るもの、又は途中で力尽きて残されるものもいる様である。

大きな二つの問題点

居残りの彼たちが、昭和10年に国の天然記念物に指定されているミズスギゴケ（マリゴケ）を食

べてしまうと言う事、春になって雪が溶けて来ると丁度新芽が伸びてくる所を食べられてしまうばかりか根こそぎ食べてしまう。これでは文化財としてのミズスギゴケが全滅する恐れがある、又農繁期に入り田植えが終わった後、ほ場に入り植えたばかりの早苗を掘り起こしたり、足でこねたり、ほ場を荒らしてしまうと言う問題点が起こって来た事で、猪苗代湖北岸近辺に位置する耕作者からの苦情が絶えない事である。

ほ場に入って来たのを見つけて追い払おうとすると飛ばないから両足両羽で、ほ場を泳ぐ様にして逃げて行くのでよけいに苗が荒らされてしまい植え直すのは初めから行うのより何倍もの手間がかかる仕事である。後は今まで行っていた彼たちの治療と保護の以上4点。

猪苗代湖北岸近辺には一面が田園である事と、湖の中には天然記念物が生育している事で、この被害はクローズアップされている。

この問題点を解決しようとして毎日頭を悩ませている。帰れなくなった彼たちはもう自然に生きられないのだから保護鳥ではない。今考えている事は、捕獲して治療をし公共事業が公共施設の整った所で、より安全に自然に近いかたちで保護をし放してやりたいと願っている。

雪

雪に関係する事ですが、彼たちの渡来も早いような時は、比較的雪も早いし多い様だ。こちらの方は、まだ偶然に過ぎない。渡来が遅かった年は、1月中旬を過ぎてもまだ雪が積もらない年もあった。(平成4年など)

今のところ北の方が早く寒くなったので白鳥を初め渡り鳥などは自然に敏感なので早く渡来したのではないかと思っているがなんとなく雪の多い(早い)か遅い(少ない)かは、分かるような気がする。

稲 作

稲の作柄について、例年ならば飛翔する回数が多く、飛翔時の彼たちの数も多く空一面が真白になるほど広がり、ホーホーと知らせてくれるが、冷害又は凶作の年などは上記に反比例してあまり飛翔もしないし飛翔時の彼たちも少なくひっそりとした感じに感じられる。

最後に天気の仕事については、学術的には何の根拠もないが、今まで体験して来た事のありのままを書こうとした。私の文章で理解出来なかった点が多かったかと思われるが、今後も続けて行きたいと思っているのでお読みになられました方でお気づきの点があったらご指導のほど宜しくお願いします。

今まで餌を提供下さった人達や励ましのお言葉をいただきました皆様方に感謝申し上げますと共に今後出来る限り私なりに保護と観察を続けて行きたいと思っているので今後共ご協力のほど宜しくお願い致します。

追 伸

私は、ただ見たありのままをのべましたので、上記の文章の中で、間違いが数多くあるかも知れません。お気づきの点があったらご指導くださいますようお願い致します。

平成6年7月現在